

浅田和茂 教授 略歴・主な業績

略 歴

略 歴

- 1946年 9月13日 北海道美唄市に生まれる
1965年 3月 北海道立美唄東高等学校卒業
1965年 4月 京都大学法学部入学
1969年 3月 京都大学法学部卒業
1969年 4月 京都大学大学院法学研究科修士課程入学
1971年 3月 京都大学大学院法学研究科修士課程修了（法学修士）
1971年 4月 関西大学大学院法学研究科博士課程入学
1974年 3月 関西大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学
1974年 7月 西ドイツ・ミュンヘン大学在外研究（～1976年 3月）
1974年10月 西ドイツ・ミュンヘン大学法学部入学
1976年 3月 西ドイツ・ミュンヘン大学法学部退学
1982年 9月 西ドイツ・ミュンヘン大学在外研究（～1984年 8月）
1989年 4月 西ドイツ・ミュンヘン大学在外研究（～1989年 9月）
2000年12月 博士（法学・大阪市立大学）
2001年 8月 ドイツ・ハンブルグ大学在外研究（～2001年 9月）

職 歴

- 1971年 4月 関西大学法学部助手
1974年 4月 関西大学法学部専任講師
1977年 4月 関西大学法学部助教授
1980年 4月 大阪市立大学法学部助教授
1988年 4月 大阪市立大学法学部教授
1993年 9月 中国・西南政法学院客座教授
2001年 4月 大阪市立大学大学院法学研究科教授
2004年 4月 大阪市立大学大学院法学研究科法曹養成専攻教授
2004年 4月 大阪市立大学副学長（～2006年 3月）
2008年 4月 立命館大学大学院法務研究科教授

*上記のほか、立命館大学法学部、大阪女学院大学国際英語学部、金沢大学法学部、九州大学大学院法学研究院、京都大学総合人間学部、甲南大学法学部、島根大学大学院法学研究科、同志社大学大学院法学研究科などで非常勤講師として勤務する。

所属学会・社会活動等

日本刑法学会

法と精神医療学会

法と心理学会

日本医事法学会

日独法学会

1988年8月 日本弁護士連合会刑事法制委員会助言者（～現在に至る）

1991年5月 日本刑法学会理事（～2009年5月）

1992年3月 法と精神医療学会理事（～現在に至る）

1993年10月 大阪弁護士会懲戒委員（～1996年3月）

1997年5月 日本刑法学会常務理事（～2009年5月）

1998年3月 法と精神医療学会理事長（～2001年3月）

1999年10月 法と心理学会理事（～2009年10月）

2004年10月 法と心理学会常務理事（～2006年10月）

2007年9月 刑事制裁・量刑研究会代表（～2014年3月）

2012年11月 法と心理学会理事（～2015年11月）

2013年4月 刑法読書会会長（～現在に至る）

2015年1月 陪審裁判を復活する会共同代表（～現在に至る）

*上記のほか、医療と法関西フォーラム会員、大阪刑事訴訟法研究会会員、大阪市立大学教育後援会顕彰委員会委員長、京都府立医科大学特定認定再生医療等委員会委員、経済刑法研究会会員、刑事司法研究会会員、刑事判例研究会会員、刑事法学の動き会員、日本学術振興会科学研究費助成事業審査委員、日本フンボルト協会常務理事、立命館大学 R-GIRO プログラム法心理・司法臨床センター研究員、龍谷大学矯正保護センター研究員などを歴任。

主な業績

単 著

- 『刑事責任能力の研究 上巻——限定責任能力論を中心として——』
(成文堂) (1983年 8月)
- 『科学捜査と刑事鑑定』〔大阪市立大学法学叢書 (44)〕
(有斐閣) (1994年 3月)
- 『刑事責任能力の研究 下巻』
(成文堂) (1999年12月)
- 『刑法総論』
(成文堂) (2005年 6月)
- 『刑法総論〔補正版〕』
(成文堂) (2007年 3月)
- 『遠ざかる風景 私の刑事法研究』
(成文堂) (2016年10月)

共著・共編・共訳書

- 『法理論の現在』
アルトゥール・カウフマン, ヴィンフリート・ハッセマー編
竹下賢, 永田真三郎, 福滝博之, 真鍋俊二, 山中敬一と共訳
(ミネルヴァ書房) (1979年 6月)
- 『現代刑法学原論〔総論〕』
刑法理論研究会著
(三省堂)〔初版〕(1983年 4月)
〔改訂版〕(1987年 4月)
〔第3版〕(1996年 4月)
- 『先端医療と刑法』
アルビン・エーザー著 上田健二と共編訳
(成文堂) (1990年 6月)
- 『現代刑法体系の基本問題』
ベルント・シューネマン編著 中山研一と共監訳
(成文堂) (1990年 7月)
- 『刑事訴訟法公判手続対案』〔翻訳叢書27〕

ドイツ対案グループ著 浅田和茂監訳
川口浩一, 松生光正, 山名京子訳
(成文堂) (1991年11月)

『刑法総論』〔青林法学双書〕

斉藤豊治, 佐久間修, 松宮孝明, 山中敬一と共著
(青林書院)〔初版〕(1993年6月)
〔改訂版〕(1997年3月)

『刑法各論』〔青林法学双書〕

斉藤豊治, 佐久間修, 松宮孝明, 山中敬一と共著
(青林書院)〔初版〕(1995年12月)
〔補正版〕(2000年4月)

『現代刑法入門』〔有斐閣アルマ〕

内田博文, 上田寛, 松宮孝明と共著
(有斐閣)〔初版〕(1996年11月)
〔第2版〕(2004年4月)
〔第2版補訂〕(2008年4月)
〔第3版〕(2012年4月)
〔第3版補訂〕(2014年9月)

『レヴィジョン刑法1 共犯論』

中山研一, 松宮孝明と共著
(成文堂) (1997年11月)

『転換期の刑事法学』〔井戸田侃先生古稀祝賀論文集〕

高田昭正, 久岡康成, 松岡正章, 米田泰邦と共編
(現代人文社) (1999年10月)

『刑事・少年司法の再生』〔梶田英雄判事・守屋克彦判事退官記念論文集〕

川崎英明, 安原浩, 石塚章夫と共編
(現代人文社) (2000年10月)

『レヴィジョン刑法2 未遂犯論・罪数論』

中山研一, 松宮孝明と共著
(成文堂) (2002年2月)

『環境刑法概説』

中山研一, 神山敏雄, 斉藤豊治と共編
(成文堂) (2003年10月)

『量刑法の総合的検討』〔松岡正章先生古稀祝賀〕

前野育三, 齊藤豊治, 前田忠弘と共編
(成文堂) (2005年2月)

『ロクシン刑事法学への憧憬』

ベルント・シューネマン編著 吉田宣之, 鈴木彰雄と共訳
(信山社) (2005年2月)

“Das Recht vor den Herausforderungen neuer Technologien”

Heinz-Dieter Assmann, Zentaro Kitagawa,
Junichi Murakami, Martin Netttesheim と共編
(Mohr Siebeck) (2006年)

『理論刑法学の探究』

川端博, 山口厚, 井田良と共編
(成文堂) 〔第1号〕(2008年5月)
〔第2号〕(2009年6月)
〔第3号〕(2010年6月)
〔第4号〕(2011年5月)
〔第5号〕(2012年5月)
〔第6号〕(2013年6月)
〔第7号〕(2014年6月)
〔第8号〕(2015年6月)
〔第9号〕(2016年6月)
〔第10号〕(2017年7月)

『新経済刑法入門』

神山敏雄, 齊藤豊治, 松宮孝明と共編著
(成文堂) 〔初版〕(2008年12月)
〔第2版〕(2013年7月)

『レヴィジョン刑法3 構成要件・違法性・責任』

中山研一, 松宮孝明と共著
(成文堂) (2009年6月)

『医事刑法から統合的医事法へ』

アルビン・エーザー著 上田健二と共編訳
(成文堂) (2011年2月)

『人権の刑事法学』〔村井敏邦先生古稀記念論文集〕

- 石塚伸一, 葛野尋之, 後藤昭, 福島至と共編
(日本評論社)(2011年9月)
- 『疾風怒濤 一法律家の生涯——佐伯千仞先生に聞く——』
井戸田侃と共に聞き手を担当
(成文堂)(2011年11月)
- 『日独シンポジウム 量刑法の基本問題——量刑理論と量刑実務との対話——』
ヴォルフガング・フリッシュ, 岡上雅美と共編
(成文堂)(2011年11月)
- 『新基本法コンメンタール 刑法』
井田良と共編
〔初版〕別冊法学セミナー219号(2012年9月)
〔第2版〕別冊法学セミナー250号(2017年9月)
- 『刑事法理論の探求と発見』〔斉藤豊治先生古稀祝賀論文集〕
川崎英明, 葛野尋之, 前田忠弘, 松宮孝明と共編
(成文堂)(2012年12月)
- 『改革期の刑事法理論』〔福井厚先生古稀祝賀論文集〕
葛野尋之, 後藤昭, 高田昭正, 中川孝博と共編
(法律文化社)(2013年6月)
- 『自由と安全の刑事法学』〔生田勝義先生古稀祝賀論文集〕
上田寛, 松宮孝明, 本田稔, 金尚均と共編
(法律文化社)(2014年9月)
- 『刑法の理論と体系』〔佐伯千仞著作選集 第1巻〕
中川祐夫監修 井戸田侃, 久岡康成と共編
(信山社)(2014年11月)
- 『違法性と犯罪類型, 共犯論』〔佐伯千仞著作選集 第2巻〕
中川祐夫監修 井戸田侃, 久岡康成と共編
(信山社)(2015年5月)
- 『責任の理論』〔佐伯千仞著作選集 第3巻〕
中川祐夫監修 井戸田侃, 久岡康成と共編
(信山社)(2015年7月)
- 『刑事法の歴史と思想, 陪審制』〔佐伯千仞著作選集 第4巻〕
中川祐夫監修 井戸田侃, 久岡康成と共編
(信山社)(2015年8月)

『生きている刑事訴訟法』〔佐伯千仞著作選集 第5巻〕

中川祐夫監修 井戸田侃, 久岡康成と共編
(信山社) (2015年12月)

論 文

「刑事訴訟に於ける鑑定人の地位について——付・裁判官と鑑定人との関係——」

関西大学法学論集22巻1号 p. 1 (1972年6月)

「ドイツ刑法における限定責任能力論の展開——帝国刑法典成立以前——」

関西大学法学論集23巻4・5・6号 p. 287 (1974年1月)

「ドイツ刑法における限定責任能力論の展開——一九三三年改正法以前——」

関西大学法学論集24巻4号 p. 1 (1974年9月)

「責任と答責性——ロクシン説の検討——」

平場安治博士還暦祝賀『現代の刑事法学(上)』(有斐閣) p. 272 (1977年7月)

「比較法的考察 西ドイツの刑事鑑定制度」「わが国の刑事鑑定制度」

上野正吉, 兼頭吉市, 庭山英雄編

『刑事鑑定の理論と実務 情状鑑定の科学化をめざして』

(成文堂) p. 11, p. 85 (1977年12月)

「ドイツ刑法における限定責任能力論の展開

——一九三三年改正法以後(一)～(四・完)——」

関西大学法学論集27巻6号 p. 1 (1978年2月)

関西大学法学論集30巻4号 p. 49 (1980年11月)

関西大学法学論集30巻6号 p. 55 (1981年3月)

関西大学法学論集31巻1号 p. 169 (1981年4月)

「古賀廉造の刑法理論」(中義勝と共同執筆)

法律時報50巻9号 p. 85 (1978年9月)

「裁判と鑑定の諸問題——具体例を通して——」

ジュリスト694号 p. 40 (1979年6月)

「刑事責任能力論の現状と課題——責任の実践的把握に関連して——」

精神神経学雑誌82巻4号 p. 189 (1980年4月)

「再審運用の実態 徳本事件」「比較再審法 西ドイツ」

鴨良弼編『刑事再審の研究』(成文堂) p. 427, p. 518 (1980年10月)

「限定責任能力論序説(一)——わが国における展開を中心として——」

大阪市立大学法学雑誌28巻3・4号 p. 135 (1982年3月)

- 「触法精神障害者に関する手続と精神鑑定役割」
ジュリスト772号 p. 50 (1982年8月)
- 「詐欺罪の問題点」
中山研一, 西原春夫, 藤木英雄, 宮澤浩一編
『現代刑法講座 第4巻 刑法各論の諸問題』(成文堂) p. 311 (1982年9月)
- 「西ドイツ刑法における差別行為処罰規定について」
部落解放研究42号 p. 13 (1984年12月)
- 「西ドイツにおける未決拘禁法改正の動向——西ドイツ刑事訴訟改正作業班
『未決拘禁——法律草案および理由書』を中心として——」
大阪市立大学法学雑誌31巻3・4号 p. 1 (1985年3月)
- “Strafwürdigkeit als strafrechtliche Systemkategorie”
ZStW 97, Heft 2, p. 465 (1985年)
- 「西ドイツ刑法の差別行為処罰規定」
社団法人 部落解放研究所編
『世界はいま——諸外国の差別撤廃法と日本——』 p. 149 (1985年12月)
- 「責任能力論(上)(下)」
法学セミナー394号 p. 72 (1987年10月)
法学セミナー395号 p. 68 (1987年11月)
- 「経済犯罪をめぐる最近の動向——『経済刑法研究会』における検討を中心と
して——」(中山研一と共同執筆)
大阪市立大学証券研究年報2号 p. 49 (1987年11月)
- 「ポリグラフ検査について——その法的性質および利用上の問題点——」
大阪市立大学法学雑誌34巻3・4号 p. 1 (1988年3月)
- 「責任能力論」
芝原邦爾, 堀内捷三, 町野朔, 西田典之編『刑法理論の現代的展開——総論I』
(日本評論社) p. 203 (1988年4月)
- 「鑑定の評価」
刑法雑誌29巻3号 p. 57 (1989年2月)
- 「戦後刑事司法の軌跡——その担い手達の活動——」
(川崎英明, 高田昭正と共同執筆)
ジュリスト930号 p. 129 (1989年3月)
- 「熊本水俣病最高裁決定の検討・総説——付論・傷害罪の法的性質について——」
刑法雑誌29巻4号 p. 1 (1989年4月)

「西ドイツにおける刑事手続の進行」

日本弁護士連合会人権擁護委員会編

『西ドイツにおける誤判と再審——西ドイツ刑事司法調査団(1989.4~5)報告書』

(日本弁護士連合会) p. 9 (1989年9月)

「青色申告承認の取消と通脱罪の成否」

大阪市立大学法学雑誌36巻3・4号 p. 1 (1990年3月)

「電子計算機使用詐欺罪の処罰規定」(伊賀興一と共同執筆)

日本弁護士連合会刑法改正対策委員会編『コンピュータ犯罪と現代刑法』

(三省堂) p. 149 (1990年5月)

「科学捜査の現状と問題点——科学機器の利用を中心として——」

石松竹雄判事退官記念論文集『刑事裁判の復興』

(勁草書房) p. 85 (1990年12月)

「刑事手続における個人関係情報の利用

——ドイツ刑事訴訟法一部改正草案の場合——」

高田卓爾博士古稀祝賀『刑事訴訟の現代的動向』

(三省堂) p. 315 (1991年4月)

「暴力団規制と暴力団新法の問題点」

法学セミナー440号 p. 48 (1991年8月)

「科学的尋問と取調べ」

井戸田侃編集代表『総合研究 被疑者取調べ』

(日本評論社) p. 369 (1991年8月)

「限定責任能力論序説(二)——わが国における展開を中心として——」

大阪市立大学法学雑誌38巻3・4号 p. 97 (1992年3月)

「原因において自由な行為」

中義勝先生古稀祝賀『刑法理論の探究——中刑法理論の検討——』

(成文堂) p. 135 (1992年3月)

「外国人裁判と刑事手続」

ジュリスト1000号 p. 237 (1992年5月)

「日本における捜査手続の問題点」

石部雅亮, 松本博之編『法の実現と手続——日独シンポジウム——』

(信山社) p. 3 (1993年2月)

“Probleme des Ermittlungsverfahrens in Japan”

Karl Kroeschell (Hrsg.), Recht und Verfahren

(C.F. Müller) p. 1 (1993年)

「両罰規定における罰金額連動の切り離しについて」

自由と正義45巻1号 p. 35 (1994年1月)

「責任と予防」

阿部純二, 板倉宏, 内田文昭, 香川達夫, 川端博, 曾根威彦編
『刑法基本講座〈第3巻〉違法論, 責任論』
(法学書院) p. 219 (1994年2月)

「古賀廉造の刑法理論」(中義勝と共同執筆)

吉川経夫, 内藤謙, 中山研一, 小田中聰樹, 三井誠編
『刑法理論史の総合的研究』(日本評論社) p. 109 (1994年3月)

「ドイツ刑事司法における負担軽減立法について」

大阪市立大学法学雑誌40巻4号 p. 166 (1994年3月)

「外国人事件と刑事司法——概観——」

刑法雑誌33巻4号 p. 131 (1994年7月)

“Bemerkungen über die deutschen Referate aus japanischer Sicht mit
Erklärungen über die japanische Situation der einschlägigen
Problembereiche”

Hans-Heiner Kühne / Koichi Miyazawa (Hrsg.),
Neue Strafrechtsentwicklungen im deutsch-japanischen Vergleich
(Carl Heymanns) p. 255 (1995年)

「財産刑の改正について」

森下忠先生古稀祝賀 下巻『変動期の刑事政策』(成文堂) p. 665 (1995年7月)

「日本における経済犯罪への対応」

大阪市立大学法学雑誌42巻1号 p. 151 (1995年9月)

「職権濫用罪」

芝原邦爾, 堀内捷三, 町野朔, 西田典之編『刑法理論の現代的展開——各論』
(日本評論社) p. 336 (1996年6月)

「因果関係の錯誤」

香川達夫博士古稀祝賀『刑事法学の課題と展望』(成文堂) p. 281 (1996年10月)

「『組織的な犯罪』対策立法の問題点」

法律時報68巻13号 p. 2 (1996年12月)

「共犯論覚書」

中山研一先生古稀祝賀論文集 第三巻『刑法の理論』

- (成文堂) p. 271 (1997年2月)
- 「責任能力と鑑定」
佐伯千仞先生卒寿祝賀論文集『新・生きている刑事訴訟法』
(成文堂) p. 203 (1997年2月)
- 「刑法における生命の保護と自己決定」
松本博之・西谷敏編『現代社会と自己決定権——日独シンポジウム——』
(信山社) p. 131 (1997年5月)
- “Lebensschutz und Selbstbestimmung im Strafrecht”
Dieter Leipold (Hrsg.),
Selbstbestimmung in der modernen Gesellschaft aus
deutscher und japanischer Sicht
(C.F.Müller) p. 85 (1997年)
- 「刑事事件における鑑定をめぐる諸問題」
日本弁護士連合会編
『現代法律実務の諸問題〈平成8年版〉』〔日弁連研修叢書〕
p. 583 (1997年10月)
- 「科学的証拠とその評価」
光藤景皎編『事実誤認と救済』(成文堂) p. 41 (1997年11月)
- 「教唆犯と具体的事実の錯誤」
『西原春夫先生古稀祝賀論文集 第二巻』(成文堂) p. 403 (1998年3月)
- 「『組織的犯罪』対策立法の動向」
犯罪と刑罰13号 p. 1 (1998年6月)
- 「年少者の証言と鑑定」
竹澤哲夫先生古稀祝賀記念論文集『誤判の防止と救済』
(現代人文社) p. 341 (1998年7月)
- 「脳死・臓器移植と刑法」
『罪與刑——林山田教授六十歳生日祝賀論文集』
(五南図書出版) p. 283 (1998年10月)
- 「『原因において自由な行為』再論」
産大法学32巻2・3号 p. 1 (1998年12月)
- 「刑事手続と精神鑑定」
季刊刑事弁護17号 p. 21 (1999年1月)
- 「日本における環境刑法学の生成と発展」

松本博之, 西谷敏, 佐藤岩夫編『環境保護と法——日独シンポジウム——』
(信山社) p. 545 (1999年3月)

「誤判と証拠物・鑑定について」

——日弁連人権擁護委員会編『誤判原因の実証的研究』を読む——」

庭山英雄先生古稀祝賀記念論文集『民衆司法と刑事法学』
(現代人文社) p. 193 (1999年6月)

「主観的違法要素と犯罪論——結果無価値論の立場から——」

現代刑事法3号 p. 46 (1999年7月)

「刑法的介入の早期化と刑法の役割」

井戸田侃先生古稀祝賀論文集『転換期の刑事法学』
(現代人文社) p. 723 (1999年10月)

「実行行為開始後の心神喪失・耗弱について」

宮澤浩一先生古稀祝賀論文集 第二巻『刑法理論の現代的展開』
(成文堂) p. 361 (2000年5月)

「未遂犯の処罰根拠——実質的・形式的客観説の立場から——」

現代刑事法17号 p. 36 (2000年9月)

「刑事司法における被害者の地位について」

梶田英雄判事・守屋克彦判事退官記念論文集『刑事・少年司法の再生』
(現代人文社) p. 131 (2000年10月)

「被害者の同意の体系的地位について」

産大法学34巻3号 p. 1 (2000年10月)

「原因において自由な行為——全面否定説の展開——」

現代刑事法20号 p. 42 (2000年12月)

“Entstehung und Entwicklung des Umweltstrafrechts in Japan”

Dieter Leipold (Hrsg.),

Umweltschutz und Recht in Deutschland und Japan

(C.F.Müller) p. 403 (2000年)

「証言の信用性と心理学鑑定——ドイツ連邦裁判所の新判例について——」

『田宮裕博士追悼論集 上巻』(信山社) p. 201 (2001年5月)

“Schuld, Schuldprinzip und strafwürdige Schuld”

Bernd Schünemann / Hans Achenbach / Wilfried Bottke /

Bernhard Haffke / Hans-Joachim Rudolph (Hrsg.),

Festschrift für Claus Roxin zum 70. Geburtstag am 15. Mai 2001

- (Walter de Gruyter) p. 519 (2001年)
「司法精神鑑定に求めるもの——責任能力の判定基準を中心に——」
法と精神医療15号 p. 33 (2001年 9月)
- 「刑事手続における個人情報の収集と利用
——ドイツ一九九九年刑事手続改正法の場合——」
『光藤景皎先生古稀祝賀論文集 上巻』(成文堂) p. 49 (2001年12月)
「刑事法における責任主義」
法律時報74巻2号 p. 10 (2002年 2月)
“Gegenwärtige Lage und Probleme der High-Tech-Kriminalität in Japan”
Dieter Leipold (Hrsg.),
Rechtsfragen des Internet und der Informationsgesellschaft
(C.F. Müller) p. 293 (2002年)
- 「国連テロ資金防止条約批准の無理と道理」
世界702号 p. 29 (2002年 6月)
- 「職権濫用罪の意義と課題」
現代刑事法39号 p. 19 (2002年 7月)
- 「治安法の発想に異議——手続法から見た『法案』の問題点——」
法と民主主義370号 p. 8 (2002年 7月)
- 「新処遇法案をめぐる経過と問題点」
季刊刑事弁護32号 p. 46 (2002年10月)
- 「日本におけるハイテク犯罪の現状と問題点」
松本博之, 西谷敏, 守矢健一編
『インターネット・情報社会と法——日独シンポジウム——』
(信山社) p. 369 (2002年11月)
- 「心神喪失者等『医療』観察法案(修正案)の法的検討」
自由と正義54巻4号 p. 39 (2003年 4月)
- 「予備罪と共犯について」
齊藤誠二先生古稀記念『刑事法学の現実と展開』(信山社) p. 363 (2003年 6月)
- 「遺伝子医療の限界としての法」
龍谷法学36巻1号 p. 157 (2003年 6月)
- 「生命科学・遺伝子研究の法的問題点」
能勢弘之先生追悼論集『激動期の刑事法学』(信山社) p. 437 (2003年 8月)
「刑法改正問題と精神医療」

ジュリスト増刊『精神医療と心神喪失者等医療観察法』p. 223 (2004年3月)
“Recht als Grenze der genetischen Medizin – aus japanischer Perspektive”

Hans-Ludwig Schreiber / Henning Rosenau/
Shinichi Ishizuka / Sangyun Kim (Hrsg.),
Recht und Ethik im Zeitalter der Gentechnik
Deutsche und japanische Beiträge zu Biorecht und Bioethik
(Vandenhoeck & Ruprecht) p. 84 (2004年)

「量刑基準」

松岡正章先生古稀祝賀『量刑法の総合的検討』(成文堂) p. 25 (2005年2月)

「刑事鑑定と心理学」

村井敏邦編『刑事司法と心理学——法と心理学の新たな地平線を求めて』
(日本評論社) p. 15 (2005年5月)

「共謀罪立法化の動きと問題点」

季刊刑事弁護44号 p. 8 (2005年10月)

「共謀共同正犯の拡散」

小田中聰樹先生古稀記念論文集
『民主主義法学・刑事法学の展望 下巻——刑法・民主主義と法』
(日本評論社) p. 143 (2005年12月)

「刑事司法手続きと精神鑑定」

松下正明総編集『刑事事件と精神鑑定』〔司法精神医学2〕
(中山書店) p. 76 (2006年1月)

「法学者からみた精神鑑定」

松下正明総編集『鑑定例集』〔司法精神医学6〕
(中山書店) p. 298 (2006年2月)

“Die Gentechnik und der Schutz des menschlichen Lebens”

Kazushige Asada / Heinz-Dieter Assmann / Zentaro Kitagawa /
Junichi Murakami / Martin Nettesheim (Hrsg.),
Das Recht vor den Herausforderungen neuer Technologien
(Mohr Siebeck) p. 179 (2006年)

「法人の犯罪とその処罰」

神山敏雄先生古稀祝賀論文集 第二巻『経済刑法』(成文堂) p. 43 (2006年8月)

「日本における法人の刑法上の責任」

松本博之, 西谷敏, 守矢健一編『団体・組織と法——日独シンポジウム——』

- (信山社) p. 279 (2006年9月)
- 「共謀罪が犯罪論に及ぼす影響」
法律時報78巻10号 p. 50 (2006年9月)
- “Zur strafrechtlichen Verantwortlichkeit juristischer Personen in Japan”
Dieter Leipold (Hrsg.),
Verbände und Organisationen im japanischen und deutschen Recht :
Japanisch-deutsches Symposium Osaka 2005
(Carl Heymanns) p. 247 (2006年)
- 「罪数論と刑事手続」
『鈴木茂嗣先生古稀祝賀論文集 [下巻]』(成文堂) p. 513 (2007年5月)
- 「『地位利用』の犯罪論」
法学セミナー635号 p. 22 (2007年11月)
- 「刑法典の百年 責任論」
ジュリスト1348号 p. 29 (2008年1月)
- 「ターゲットベスタント論」
犯罪と刑罰18号 p. 19 (2008年3月)
- 「刑事立法の重罰化」
前野育三先生古稀祝賀論文集『刑事政策学の体系』
(法律文化社) p. 331 (2008年4月)
- “Die Gesetzgebung zur »Conspiracy« in Japan”
Ulrich Sieber / Gerhard Dannecker / Urs Kindhäuser /
Joachim Vogel / Tonio Walter (Hrsg.),
Strafrecht und Wirtschaftsstrafrecht
- Dogmatik, Rechtsvergleich, Rechtstatsachen -
Festschrift für Klaus Tiedemann zum 70. Geburtstag
(Carl Heymanns) p. 313 (2008年)
- 「佐伯刑事法学の形成と展開」
刑法雑誌48巻1号 p. 67 (2008年8月)
- 「裁判員裁判と刑法——『難解な法律概念と裁判員裁判』を読む——」
立命館法学327・328号 p. 1 (2010年3月)
- 「刑事責任能力と発達障害」
浜井浩一, 村井敏邦編『発達障害と司法 非行少年の処遇を中心に』
(現代人文社) p. 129 (2010年3月)

“Die Rolle der Rechtsprechung und der Gesetzgebung im Strafrecht :
Ein Beispiel zur Japanisierung der europäischen Dogmatik”

Rolf Stürner (Hrsg.),

Die Bedeutung der Rechtsdogmatik für die Rechtsentwicklung

(Mohr Siebeck) p. 189 (2010年)

「医療観察法と2つの最高裁判例」

季刊刑事弁護63号 p. 44 (2010年7月)

“Funktion der Strafe und Maßregelbehandlung – Alternativen für die
Gesellschaft im Gefühl der Unsicherheit in Japan”

Henning Rosenau / Sangyun Kim (Hrsg.),

Straftheorie und Strafgerechtigkeit : Deutsch-Japanischer Strafrechtsdialog

(Peter Lang) p. 111 (2010年)

“Strafwürdigkeit von Insiderhandeln in Japan”

Heinz-Dieter Assmann / Tamotsu Isomura /

Hiruyuki Kansaku / Zentaro Kitagawa / Martin Nettesheim (Hrsg.),

Markt und Staat in einer globalisierten Wirtschaft: Japanisch – deutsches

Symposium in Kyoto vom 18. bis 20. September 2008

(Mohr Siebeck) p. 249 (2010年)

「刑法における判例と立法の役割——ヨーロッパ法教義学の日本化の一例——」

松本博之, 野田昌吾, 守矢健一編

『法発展における法ドグマティックの意義——日独シンポジウム——』

(信山社) p. 183 (2011年2月)

「裁判員裁判の量刑の基本問題 刑法理論の観点から」

季刊刑事弁護66号 p. 26 (2011年4月)

「裁判員法の見直しについて」

村井敏邦先生古稀記念論文集『人権の刑事法学』

(日本評論社) p. 217 (2011年9月)

“Strafzumessung und Laienrichtersystem in Japan”

Uwe Hellmann / Christian Schröder (Hrsg.),

Festschrift für Hans Achenbach

(C.F. Müller) p. 1 (2011年)

「量刑事実としての前科前歴および犯行後の事情」

ヴォルフガング・フリッシュ, 浅田和茂, 岡上雅美編

『量刑法の基本問題——量刑理論と量刑実務との対話——』

(成文堂) p. 167 (2011年11月)

「責任能力と精神鑑定」

犯罪と刑罰21号 p. 47 (2011年11月)

「公務員法における刑事罰と行政罰」

法律時報増刊『国公法事件上告審と最高裁判所』 p. 155 (2011年12月)

“Umstände vor und nach der Tat als Strafzumessungstatsachen”

Wolfgang Frisch (Hrsg.),

Grundfragen des Strafzumessungsrechts aus deutscher und japanischer Sicht

(Mohr Siebeck) p. 151 (2011年)

「佐伯・平野刑法学の犯罪論体系」

法律時報84巻1号 p. 16 (2012年1月)

「刑法全面改正の課題と展望」

『三井誠先生古稀祝賀論文集』(有斐閣) p. 1 (2012年1月)

「刑法・刑法学の歴史の変遷」

法学セミナー687号 p. 29 (2012年4月)

「誤想防衛と故意説・責任説について」

齊藤豊治先生古稀祝賀論文集『刑事法理論の探求と発見』

(成文堂) p. 111 (2012年12月)

「判例に見られる罪刑法定主義の危機」

立命館法学345・346号 p. 1 (2013年3月)

“Probleme strafrechtlicher Sanktionen in Japan”

Georg Freund / Uwe Murmann / René Bloy / Walter Perron (Hrsg.),

Grundlagen und Dogmatik des gesamten Strafrechtssystems:

Festschrift für Wolfgang Frisch zum 70. Geburtstag

(Duncker & Humblot) p. 1107 (2013年)

「中山先生の保安処分論」

犯罪と刑罰22号 p. 83 (2013年3月)

「主観的事実の立証と実体刑法の改正」

福井厚先生古稀祝賀論文集『改革期の刑事法理論』

(法律文化社) p. 496 (2013年6月)

「改正臓器移植法の問題点」

足立昌勝先生古稀記念論文集『近代刑法の現代的論点』

(社会評論社) p. 14 (2014年3月)

『新時代の刑事法』管見」

『曾根威彦先生・田口守一先生古稀祝賀論文集 [上巻]』

(成文堂) p. 1 (2014年3月)

「日本の精神医療と医療観察法——町野論文を読む」

町野朔先生古稀記念『刑事法・医事法の新たな展開 下巻』

(信山社) p. 345 (2014年3月)

「自由と安全と生命倫理——胚の保護を巡って——」

生田勝義先生古稀祝賀論文集『自由と安全の刑事法学』

(法律文化社) p. 125 (2014年9月)

「共犯の本質と処罰根拠——川端説を契機として——」

『川端博先生古稀記念論文集 [上巻]』(成文堂) p. 503 (2014年10月)

“Embryonenschutz im japanischen Recht im Vergleich zum deutschen Recht”

Björn Burkhardt / Hans-Georg Koch / Walter Gropp /

Otto Lagodny / Margret Spaniol / Susanne Walther / Alfred Künschner /

Jörg Arnold / Walter Perron (Hrsg.), Scripta amicitiae :

Freundschaftsgabe für Albin Eser zum 80. Geburtstag am 26. Januar 2015

(BWV) p. 13 (2015年)

「税理士法59条1項3号(同法52条)について」

税経新報630号 p. 4 (2015年2月)

「法益論の観点から近時の詐欺事件を考える」

季刊刑事弁護83号 p. 63 (2015年7月)

「倉敷民商事件第一審判決の検討」

立命館法学362号 p. 198 (2015年12月)

「刑法全面改正への道——犯罪類型と法定刑について——」

『山中敬一先生古稀祝賀論文集 [上巻]』(成文堂) p. 15 (2017年4月)

分担執筆

「朝憲紊乱とは何か」「刑法92条の『外国国章の除去』」「『公務員』の意義」

「職務行為の適法性の基準」「『職務を執行するに当り』の意義」「国税滞納

処分は『強制執行』に含まれるか」「『公正なる価格』の意義」「『蔵匿・隠避』

の意義」「証拠湮滅罪の要件」「犯人による偽証の教唆」

西原春夫, 大谷実編『刑法200題<刑法演習ノート>』〔有斐閣双書〕

(有斐閣) p. 92, p. 93, p. 94, p. 95, p. 96, p. 97,
p. 98, p. 99, p. 100, p. 101 (1974年7月)

「探証科学・行動科学と専門家の役割——刑事手続の科学化とその限界」

松尾浩也, 鈴木茂嗣編『刑事訴訟法を学ぶ』〔有斐閣選書〕

(有斐閣)〔初版〕p. 108 (1977年11月)

〔新版〕p. 130 (1993年3月)

「行政と刑法」

中山研一編『現代刑法入門』(法律文化社) p. 324 (1977年12月)

「公訴時効の起算点——とくに結果的加重犯の場合について——」

「公訴時効制度の存在理由」

ジュリスト増刊『法律学の争点シリーズ6 刑事訴訟法の争点』

p. 110, p. 112 (1979年7月)

「刑法の解釈」「刑法学派の対立」「罪刑法定主義」「刑法の効力」「犯罪論の

体系」「刑法における行為の意義」

別冊法学セミナー40号『司法試験シリーズ3 刑法』

p. 20, p. 22, p. 23, p. 24, p. 25, p. 27 (1979年7月)

別冊法学セミナー56号『司法試験シリーズ3 刑法〔新版〕』

p. 22, p. 24, p. 25, p. 26, p. 27, p. 29 (1983年9月)

「証言と鑑定との区別」「職権証拠調べ」

別冊法学セミナー45号『司法試験シリーズ6 刑事訴訟法』

p. 221, p. 222 (1980年10月)

「捜索・押収・検証・鑑定・証人尋問」

田宮裕編『ホーンブック 刑事訴訟法』

(北樹出版)〔初版〕p. 96 (1981年2月)

〔新版〕p. 100 (1993年4月)

〔改訂新版〕p. 103 (1995年1月)

「起訴状一本主義」「検察官の客観義務」「公判専従論」

法学セミナー増刊『総合特集シリーズ16 現代の検察〔日本検察の実態と理論〕』

p. 327, p. 328, p. 329 (1981年8月)

「治療的処遇(監獄法「改正」の検討①)」

法律時報54巻1号 p. 149 (1982年1月)

「演習 刑法」(責任能力論)

法学教室19号 p. 115 (1982年4月)

- 「演習 刑法」(原因において自由な行為)
法学教室21号 p. 103 (1982年6月)
- 「演習 刑法」(期待可能性に関する錯誤)
法学教室23号 p. 129 (1982年8月)
- 「演習 刑法」(未必の故意)
法学教室25号 p. 129 (1982年10月)
- 「演習 刑法」(違法性の意識)
法学教室26号 p. 116 (1982年11月)
- 「演習 刑法」(過失犯の構造)
法学教室27号 p. 89 (1982年12月)
- 「演習 刑法」(北大電気メス事件)
法学教室30号 p. 90 (1983年3月)
- 「演習 刑法」(離隔犯における実行の着手)
法学教室32号 p. 104 (1983年5月)
- 「演習 刑法」(不能犯と幻覚犯の違い)
法学教室33号 p. 111 (1983年6月)
- 「演習 刑法」(中止犯)
法学教室35号 p. 99 (1983年8月)
- 「第7章 有責性」
大谷實編『法学基本講座 刑法総論100講』
(学陽書房) p. 161 (1983年9月)
- 「第二編 第五章 責任」
中義勝, 吉川経夫, 中山研一編『刑法1 総論』
(蒼林社) p. 169 (1984年1月)
- 「ポリグラフ検査」「証言と鑑定」「職権証拠調べ」
別冊法学セミナー68号『司法試験シリーズ6 刑事訴訟法 [新版]』
p. 122, p. 241, p. 242 (1985年6月)
- 「外国の警察法制の動向 西ドイツ 刑事警察を中心として」
法学セミナー増刊『総合特集シリーズ36 警察の現在』 p. 374 (1987年7月)
- 「昭和63年度司法試験論文式全解説 刑法」
法学セミナー405号 p. 44 (1988年9月)
- 「第5章 犯罪と法」
西村健一郎, 西井正弘, 初宿正典執筆代表『判例法学』[有斐閣ブックス]

- (有斐閣)〔初版〕 p. 177 (1988年11月)
〔改訂版〕 p. 177 (1992年 3月)
〔改訂版補訂〕 p. 177 (1996年 5月)
〔第3版〕 p. 175 (1997年 3月)
〔第3版補訂版〕 p. 179 (2002年 4月)
〔第4版〕 p. 159 (2005年 3月)
〔第5版〕 p. 165 (2012年 4月)
- 「警察官のモラルと警察機構——拾得金着服事件」
法学セミナー408号 p. 36 (1988年12月)
- 「1990年度司法試験論文式全科目問題解説 刑法」
「司法試験論文式全科目問題解説 刑法(昭和63年度,平成元年度)」
別冊法学セミナー99号『司法試験問題集・論文式 90年版』
p. 9, p. 68 (1990年10月)
- 「道義的責任——今も続く呪縛の言葉」
「責任能力・限定責任能力——文化の向上からきた諦め？」
「保安処分——許されない予防拘禁か」
町野朔編『刑法キーワード』〔有斐閣双書〕
(有斐閣)〔初版〕 p. 56, p. 58, p. 116 (1992年 3月)
〔初版補訂〕 p. 56, p. 58, p. 116 (1996年 4月)
- 「第一章 法例」
大谷實編『要説コンメンタール 刑法総論 [総則]』
(三省堂) p. 26 (1992年 6月)
- 「第三十七章 詐欺及ヒ恐喝ノ罪」
大谷實編『要説コンメンタール 刑法各論 [罪]』
(三省堂) p. 321 (1992年 6月)
- 「ワイロ罪・政治資金規正法」
中山研一, 神山敏雄, 齊藤豊治編『経済刑法入門』
(成文堂)〔初版〕 p. 21 (1992年11月)
〔第二版〕 p. 34 (1994年 5月)
- 「刑法の意義とその基本原則」「刑法の歴史と現代刑法学の課題」「責任の基礎
理論と責任主義」「責任能力」「罪数論」
浅田和茂, 齊藤豊治, 佐久間修, 松宮孝明, 山中敬一共著
『刑法総論』〔青林法学双書〕

(青林書院)〔初版〕 p. 3, p. 18, p. 158, p. 174, p. 346 (1993年6月)
〔改訂版〕 p. 3, p. 18, p. 158, p. 174, p. 347 (1997年3月)
「刑法の解釈(1)」 「刑法の解釈(2)」 「刑法学派の対立」 「刑法の効力」 「犯罪論
の体系」 「刑法における行為の意義」

別冊法学セミナー123号『司法試験シリーズ 刑法Ⅰ〔第三版〕』
p. 2, p. 4, p. 5, p. 7, p. 9, p. 11 (1993年12月)
「証拠の関連性」

川端博, 田口守一編『基本問題セミナー 刑事訴訟法』
(一粒社) p. 252 (1994年11月)
「第11章(証人尋問)前注」 「第143条 証人の資格」 「第144条 公務上秘密と
証人資格①」 「第145条 公務上秘密と証人資格②」 「第146条 証言拒絶権
①」 「第147条 証言拒絶権②」 「第148条 証言拒絶権の例外」 「第149条 証
言拒絶権③」 「第150条 出頭義務違反と過料・費用賠償」 「第151条 不出頭
罪」 「第152条 出頭しない証人に対する再召喚・勾引」 「第153条 準用規
定」 「第153条の2 証人の留置」 「第154条 宣誓」 「第155条 宣誓無能力」
「第156条 推測事項の供述」

高田卓爾, 鈴木茂嗣編『新・判例コンメンタール刑事訴訟法2 総則(2)』
(三省堂) p. 113, p. 117, p. 134, p. 139, p. 139, p. 152, p. 153, p. 154,
p. 158, p. 158, p. 159, p. 161, p. 162, p. 163, p. 168, p. 170 (1995年4月)
「ポリグラフ検査」

別冊法学セミナー136号『司法試験シリーズ 刑事訴訟法Ⅰ〔第三版〕』
p. 145 (1995年6月)

「職権証拠調べ」
別冊法学セミナー137号『司法試験シリーズ 刑事訴訟法Ⅱ〔第三版〕』
p. 53 (1995年7月)

「刑法各論の意義とその順序」 「個人に対する罪および生命・身体に対する罪の
総説」 「殺人の罪」 「傷害の罪および過失傷害の罪」 「墮胎の罪および遺棄の罪」

浅田和茂, 齊藤豊治, 佐久間修, 松宮孝明, 山中敬一共著
『刑法各論』〔青林法学双書〕
(青林書院)〔初版〕 p. 3, p. 14, p. 28, p. 42, p. 66 (1995年12月)
〔補正版〕 p. 3, p. 14, p. 28, p. 42, p. 66 (2000年4月)

「第39条 心神喪失及び心神耗弱」 「第41条 責任年齢」 「第42条 自首等」
大塚仁, 川端博編『新・判例コンメンタール 刑法2 総則(2)』

- (三省堂) p. 222, p. 266, p. 269 (1996年7月)
「はじめて刑法を学ぶ人たちへ」〔第2章 犯罪の一般的な成立要件1～4〕
「ひとつとおり読み終わって……さて」
浅田和茂, 内田博文, 上田寛, 松宮孝明著『現代刑法入門』〔有斐閣アルマ〕
(有斐閣)〔初版〕 p. 1, p. 46, p. 292 (1996年11月)
〔第2版〕 p. 1, p. 49, p. 299 (2004年4月)
〔第2版補訂〕 p. 1, p. 49, p. 301 (2008年4月)
〔第3版〕 p. 1, p. 51, p. 309 (2012年4月)
〔第3版補訂〕 p. 1, p. 53, p. 311 (2014年9月)
「証拠捏造を許さないための手続的規制 (特集 薬物・覚せい剤事件に強くなる)」
季刊刑事弁護12号 p. 110 (1997年10月)
「第240条 強盗致死傷」「第241条 強盗強姦及び同致死」「第242条 他人の占有
等に係る自己の財物」「第243条 未遂罪」「第244条 親族間の犯罪に関する特
例」「第245条 電気」
大塚仁, 川端博編『新・判例コンメンタール 刑法6 罪(3)』
(三省堂) p. 242, p. 290, p. 299, p. 308, p. 315, p. 329 (1998年4月)
「不能犯」
香川達夫, 川端博編著『新判例マニュアル 刑法I 総論』
(三省堂) p. 212 (1998年10月)
「殺人の罪」「暴行・傷害の罪」
香川達夫, 川端博編著『新判例マニュアル 刑法II 各論』
(三省堂) p. 24, p. 26 (1998年10月)
「政財官の癒着をめぐる犯罪」「脱税」
中山研一, 神山敏雄, 斉藤豊治編著『経済刑法入門 [第3版]』
(成文堂) p. 107, p. 121 (1999年3月)
「共犯と身分」「非典型担保と横領」
ジュリスト増刊『法律学の争点シリーズ1 刑法の争点 [第3版]』
p. 102, p. 194 (2000年11月)
「DNA 鑑定」
ジュリスト増刊『法律学の争点シリーズ6 刑事訴訟法の争点 [第3版]』
p. 166 (2002年4月)
「第I部 第3章 環境刑法の体系」「第I部 第6章 ドイツの環境刑法」
「第II部 第2章 大気汚染・悪臭」

中山研一, 神山敏雄, 齊藤豊治, 浅田和茂編著『環境刑法概説』
(成文堂) p. 32, p. 61, p. 116 (2003年10月)
「悪口放送妄想事件」「おとり捜査事件」「薬害による胎児性傷害事件」「社長
セクハラ事件」

平川宗信, 後藤昭編著『刑事法演習』
(有斐閣)〔初版〕p. 58, p. 111, p. 130, p. 149 (2003年12月)
〔第2版〕p. 63, p. 121, p. 141, p. 161 (2008年2月)
「客観的処罰条件」

ジュリスト増刊『新・法律学の争点シリーズ2 刑法の争点』
p. 30 (2007年10月)

「政財官の癒着をめぐる犯罪」「脱税」

神山敏雄, 齊藤豊治, 浅田和茂, 松宮孝明編著
『新経済刑法入門』(成文堂) p. 280, p. 295 (2008年12月)
「難解な法律概念が問題となる事案における公判前整理手続の在り方等」
「責任能力に関する鑑定手続の在り方」(猪崎武典氏, 北湯谷仁氏と共著)

日弁連刑事法制委員会『刑法通信112号「裁判員裁判」の弁護人のために』
p. 21 (2009年12月)

「第1編 総則 解説1 刑法の意義と機能」「第1編 総則 解説2 刑法の
歴史」「第1章 通則 第8条 他の法令の罪に対する適用」

浅田和茂, 井田良編
別冊法学セミナー219号『新基本法コンメンタール 刑法』
〔初版〕p. 2, p. 4, p. 24 (2012年9月)
〔第2版〕p. 2, p. 4, p. 23 (2017年9月)

「政財官の癒着をめぐる犯罪」

神山敏雄, 齊藤豊治, 浅田和茂, 松宮孝明編著
『新経済刑法入門 [第2版]』(成文堂) p. 317 (2013年7月)

判例紹介・判例評釈

「判例回顧 刑法」(中義勝と共同執筆)

法律時報45巻15号 p. 110 (1973年12月)

「三八二条の二の『やむを得ない事由』」(最判昭和48年2月16日・刑集27巻
1号58頁)

別冊ジュリスト51号『刑事訴訟法判例百選 [第3版]』p. 232 (1976年9月)

- 「架空会社の代表資格の冒用」（最判昭和38年12月6日・刑集17卷12号2443頁）
別冊ジュリスト58号『刑法判例百選Ⅱ各論』p. 58（1978年4月）
- 「責任能力の判定基準」（最判昭和53年3月24日・刑集32卷2号408頁）
ジュリスト臨時増刊693号『昭和53年度重要判例解説』p. 162（1979年6月）
- 「熊本水俣病刑事第一審判決——公訴時効の起算点」（熊本地判昭和54年3月22日・判時931号6頁）
- 「起訴状謄本の不送達と公訴時効の停止」（㊶東京高判昭和54年2月14日・高刑集32卷1号6頁，㊷大阪地判昭和54年1月18日・判時921号137頁）
LawSchool 3卷5号別冊付録『司法試験・最新重要判例解説』
p. 33, p. 37（1980年5月）
- 「起訴状謄本の不送達と公訴時効の停止」（㊸東京高判昭和54年2月14日・高刑集32卷1号6頁，㊹大阪地判昭和54年1月18日・判時921号137頁）
ジュリスト臨時増刊718号『昭和54年度重要判例解説』p. 220（1980年6月）
- 「躁うつ病患者の美術品窃盗事件につき心神喪失を理由に無罪を言い渡した事例」（大阪地判昭和54年5月7日・判タ387号158頁）
大阪市立大学法学雑誌27卷1号p. 103（1980年9月）
- 「同種前科による認定」（最決昭和41年11月22日・刑集20卷9号1035頁）
佐々木史朗，河上和雄，田宮裕編
別冊判例タイムズ7号『刑事訴訟法の理論と実務』p. 319（1980年10月）
- 「鑑定受託者による鑑定書」（最判昭和28年10月15日・刑集7卷10号1934頁）
別冊ジュリスト74号『刑事訴訟法判例百選〔第4版〕』p. 178（1981年10月）
- 「警察犬による臭気選別およびポリグラフ検査の証拠能力」（広島高判昭和56年7月10日・判タ450号157頁）
ジュリスト臨時増刊768号『昭和56年度重要判例解説』p. 206（1982年6月）
- 「主体別過失」
中山研一，泉正夫編『医療事故の刑事判例』（成文堂）p. 209（1983年6月）
- 「架空会社の代表資格の冒用」（最判昭和38年12月6日・刑集17卷12号2443頁）
別冊ジュリスト83号『刑法判例百選Ⅱ各論〔第2版〕』p. 160（1984年4月）
- 「行政指導と刑事責任〔石油ヤミカルテル（価格協定）事件上告審判決〕」（最判昭和59年2月24日・判時1108号8頁）
- 「責任能力の判定基準〔裁判所と鑑定人との関係〕」（最決昭和58年9月13日・判時1100号157頁）
法学セミナー363号p. 142, p. 143（1985年3月）

- 「新宿バス放火事件第一審判決」(東京地判昭和59年4月24日・判タ526号105頁)
大阪市立大学法学雑誌32巻2号 p. 223 (1985年10月)
- 「死刑判決確定後三〇年を経過した場合と刑の時効」(最決昭和60年7月19日・判時1158号28頁)
- 「刑法四二条一項の自首が成立するとされた事例」(最決昭和60年2月8日・刑集39巻1号1頁)
法学セミナー375号 p. 60, p. 61 (1986年3月)
- 「強制採尿のための在宅被疑者の連行」(函館地決昭和60年1月22日・判時1144号157頁)
- ジュリスト臨時増刊862号『昭和60年度重要判例解説』 p. 177 (1986年6月)
- 「鑑定受託者による鑑定書」(最判昭和28年10月15日・刑集7巻10号1934頁)
別冊ジュリスト89号『刑事訴訟法判例百選 [第5版]』 p. 192 (1986年9月)
- 「一九八六年の主要判例・刑法一概観と最重要判例紹介」(中山研一と共同執筆)
法学セミナー387号 p. 42 (1987年3月)
- 「中止犯——中止行為および中止の任意性——」
別冊法学教室 基本判例シリーズ3『刑法の基本判例』 p. 56 (1988年4月)
- 「保護義務者の同意なき精神障害者の強制入院」(東京地判昭和61年2月28日・家月39巻6号69頁)
別冊ジュリスト102号『医療過誤判例百選』 p. 196 (1989年6月)
- 「新潟ひき逃げ事件上告審判決について」(最判平成元年4月21日・判時1319号40頁)
大阪市立大学法学雑誌37巻3号 p. 137 (1991年1月)
- 「被害者の同意」(最決昭和55年11月13日・刑集34巻6号396頁)
別冊ジュリスト111号『刑法判例百選 I 総論 [第3版]』 p. 48 (1991年4月)
- 「宿泊を伴う取調べ——高輪グリーン・マンション殺人事件」(最決昭和59年2月29日・刑集38巻3号479頁)
別冊ジュリスト119号『刑事訴訟法判例百選 [第6版]』 p. 16 (1992年11月)
- 「死刑確定裁判後の拘置と死刑の時効の進行等」(最判平成4年7月14日・判時1437号89頁)
民商法雑誌107巻6号 p. 116 (1993年3月)
- 「同意入院の要件としての『入院の必要性』の判断」(福岡高判平成6年8月31日・判タ878号233頁)
別冊ジュリスト140号『医療過誤判例百選 [第2版]』 p. 174 (1996年12月)
- 「被害者の同意」(最決昭和55年11月13日・刑集34巻6号396頁)

別冊ジュリスト142号『刑法判例百選Ⅰ総論 [第4版]』 p. 46 (1997年4月)
「抽象的職務権限の変更と賄賂罪の成否」(最決昭和58年3月25日・刑集37巻
2号170頁)

別冊ジュリスト143号『刑法判例百選Ⅱ各論 [第4版]』 p. 204 (1997年5月)
「完全責任能力が認められた事例——連続幼女誘拐殺害事件」(東京地判平成
9年4月14日・判時1609号3頁)

ジュリスト臨時増刊1135号『平成9年度重要判例解説』 p. 153 (1998年6月)
「所持品検査——米子銀行強盗事件」(最判昭和53年6月20日・刑集32巻4号
670頁)

別冊ジュリスト148号『刑事訴訟法判例百選 [第7版]』 p. 10 (1998年8月)
「不正(競争)の目的と商品主体混同行為の処罰目的」(菊屋事件=最大判昭和
35年4月6日・刑集14巻5号525頁)

「内容・品質の虚偽表示, 不正利得目的の要否」(清酒特級事件=最決昭和53年
3月22日・刑集32巻2号316頁)

「商標の類似と不正競争目的」(盛光刑事事件=東京高判昭和58年11月7日・
高刑集36巻3号289頁)

佐々木史朗編『判例経済刑法大系 第2巻 経済法関連』

(日本評論社) p. 65, p. 74, p. 82 (2001年2月)

「パソコンネットの開設運営者が自己の管理するホストコンピューターのハー
ドディスク内にわいせつ画像データを記憶・蔵置するなどした事案におい
て, わいせつ物公然陳列罪の成立を認めた事例」(大阪高判平成11年8月
26日・判時1692号148頁)

判例評論508号 [判例時報1743号] p. 216 (2001年6月)
「間接正犯」(最決昭和58年9月21日・刑集37巻7号1070頁)

別冊ジュリスト166号『刑法判例百選Ⅰ総論 [第5版]』 p. 146 (2003年4月)
「建造物の他人性」(最決昭和61年7月18日・刑集40巻5号438頁)

別冊ジュリスト167号『刑法判例百選Ⅱ各論 [第5版]』 p. 146 (2003年4月)
「横領後の横領」(最大判平成15年4月23日・刑集57巻4号467頁)

ジュリスト臨時増刊1269号『平成15年度重要判例解説』 p. 168 (2004年6月)
「医師の採尿検査と警察への通報」(最決平成17年7月19日・刑集59巻6号
600頁)

別冊ジュリスト183号『医事法判例百選』 p. 98 (2006年9月)
「共謀共同正犯(1)——練馬事件」(最大判昭和33年5月28日・刑集12巻8号

1718頁)

別冊ジュリスト189号『刑法判例百選Ⅰ総論〔第6版〕』p.152 (2008年2月)

「一 責任能力判断の前提となる精神障害の有無及び程度並びにこれが心理学的要素に与えた影響の有無及び程度について、精神医学者の鑑定意見等が証拠となっている場合における、裁判所の判断の在り方

二 統合失調症による幻覚妄想の強い影響下で行われた行為について、正常な判断能力を備えていたとかがわせる事情があるからとって、そのことのみによって被告人が心神耗弱にとどまっていたと認めるのは困難とされた事例」(最判平成20年4月25日・判時2013号156頁)

判例評論610号〔判例時報2054号〕p.185 (2009年12月)

「ファイル共有ソフト利用者に『イカタコウイルス』を受信・実行させた行為が器物損壊罪に当たるとされた事例」(東京地判平成23年7月20日・LEX/DB文献番号25472710)

法学セミナー増刊 速報判例解説11号

新・判例解説 Watch p.135 (2012年10月)

「刑罰法規の解釈」(最判平成8年2月8日・刑集50巻2号221頁)

別冊ジュリスト220号『刑法判例百選Ⅰ総論〔第7版〕』p.4 (2014年8月)

「精神医学者の鑑定結果を採用せず死刑を言い渡した原判決が維持された事例」(最判平成27年5月25日・判時2265号123頁)

法学セミナー増刊 速報判例解説20号

新・判例解説 Watch p.199 (2017年4月)

翻 訳

エルンスト＝ワルター・ハナック

「刑事訴訟における手続再審法の改正について(抄訳)」

法律時報49巻3号p.78 (1977年3月)

クラウス＝ロクシン 「『対案』以後における刑事政策の展開」

関西大学法学論集29巻6号p.106 (1980年3月)

西ドイツ刑事訴訟改正作業班 「『未決拘禁——法律草案および理由書』(抄訳)」

法律時報56巻11号p.114 (1984年10月)

レギナ・ランゲ

「被疑者に不利益な捜査の誤り——第7回(1983年)西ドイツ刑事弁護人大会における報告——」(田中輝和と共同執筆)

- 判例タイムズ542号 p. 18 (1985年 2月)
- 西ドイツ刑事訴訟改正作業班『『未決拘禁——法律草案および理由書』(翻訳)』
大阪市立大学法学雑誌32巻 1号 p. 99 (1985年 7月)
- アルビン・エーザー「ドイツ墮胎刑法の改革——その展開と現状——」
大阪市立大学法学雑誌32巻 3号 p. 159 (1986年 2月)
- アルトゥール・カウフマン
「刑法における責任原則のための反時代的考察」(上田健二と共訳)
同志社法学197号 p. 101 (1986年 9月)
- アルトゥール・カウフマン
「正義に適った刑罰について——法哲学的エッセイ——」(上田健二と共訳)
同志社法学197号 p. 131 (1986年 9月)
- ユリウス・ゾーデン
『『ドイツ刑事立法の精神』(試訳) (一) ~ (二)』(川口浩一と共訳)
『『ドイツ刑事立法の精神』(試訳) (三・完)』(浅田和茂監訳, 井上宜裕,
戸浦雄史, 友田博之訳)
大阪市立大学法学雑誌33巻 4号 p. 113 (1987年 3月)
大阪市立大学法学雑誌34巻 2号 p. 153 (1987年12月)
大阪市立大学法学雑誌54巻 4号 p. 145 (2008年 3月)
- ヴァインフリート・ハッセマー「西ドイツにおける刑事訴訟改正の現状」
法律時報59巻10号 p. 69 (1987年 9月)
- K・H・ゲッセル
「刑事訴訟における『許容性』と法的救済手段としての『再審』」
大阪市立大学法学雑誌34巻 1号 p. 103 (1987年 9月)
- H-L・ギュンター「『可罰的不法の理論——西欧刑法の日本化の例? ——』」
犯罪と刑罰 6号 p. 153 (1989年12月)
- 「生命の保護——法制史的比較から見た現在のドイツ法——」
「ドイツ墮胎刑法の改革——その展開と現状——」
『『行為者』および『被害者』としての研究者——科学および技術の自由とその
責任に関する比較法的観察——』「資料① 西ドイツ現行刑法典」
アルビン・エーザー著 上田健二, 浅田和茂編訳『先端医療と刑法』
(成文堂) p. 55, p. 157, p. 259, p. 325 (1990年 6月)
- ベルント・シュエネマン「原著编者序文」『日本語版への序文』
ハンス・アッヘンバッハ「個人的帰責, 答責性, 責任」

- ベルント・シューネマン編著 中山研一, 浅田和茂監訳
『現代刑法体系の基本問題』(成文堂) p. i, p. iv, p. 155 (1990年7月)
- ヴァインフリート・ハッセマー「西ドイツにおける刑事訴訟改正の現状」
ヴァインフリート・ハッセマー著 堀内捷三編訳
『現代刑法体系の基礎理論』(成文堂) p. 49 (1991年9月)
- ウルフリット・ノイマン
「安楽死と臨死介助に関する倫理的・刑法的な問題点」
同志社法学222号 p. 35 (1991年11月)
- 趙炳宣「環境刑法に関する刑法解釈学の国際比較」
大阪市立大学法学雑誌39巻1号 p. 209 (1992年9月)
- ハインツ・ミュラー=ディーツ「一般予防の根本問題」(上田健二と共訳)
同志社法学227号 p. 21 (1992年9月)
- アルビン・エーザー「試験台に立つ新妊娠中絶刑法」(上田健二と共訳)
同志社法学227号 p. 121 (1992年9月)
- 「〔ドイツ墮胎〕刑法規定の対照表(抄訳)」(上田健二と共訳)
同志社法学227号 p. 162 (1992年9月)
- アルトゥール・カウフマン
「不処罰の妊娠中絶——違法か, 適法か, それとも何か——」
(上田健二と共訳)
同志社法学228号 p. 108 (1992年11月)
- アルビン・エーザー
「刑事法上の訴訟諸原理の機能的変遷——刑事手続の『再民事化』への道? ——」
石部雅亮, 松本博之編
『法の実現と手続——日独シンポジウム——』(信山社) p. 30 (1993年2月)
- 「行為の存在論的構造——人格的行為論のスケッチ——(一九六六年)」
「刑法における責任原則のための反時代的考察(一九八六年)」
「正義に適った刑罰について——法哲学的エッセイ——(一九八六年)」
「刑事裁判官の医学鑑定人依存性の問題(一九八五年)」
アルトゥール・カウフマン著 上田健二監訳『転換期の刑法哲学』
(成文堂) p. 25, p. 144, p. 268, p. 277 (1993年4月)
- ギュンター・ヤコブス「刑法上の行為概念」(上田健二と共訳)
立命館法学227号 p. 98 (1993年7月)
- 「ドイツ連邦憲法裁判所 第二次妊娠中絶判決の概要」(上田健二と共訳)

同志社法学233号 p. 158 (1993年11月)

クリスティアン・キュール

「ドイツ刑事手続法に対するヨーロッパ人権保護条約の影響」

石部雅亮, 松本博之, 児玉寛編『法の国際化への道——日独シンポジウム——』
(信山社) p. 179 (1994年3月)

アルビン・エーザー

「妊娠中絶・連邦憲法裁判所判決の具体化のための改正諸試案」

(上田健二と共訳)

同志社法学236号 p. 211 (1994年5月)

「ドイツ新妊娠中絶法——『妊婦および家族援助法改正法』とその理由書——」

(上田健二と共訳)

同志社法学246号 p. 473 (1996年3月)

ヴォルフガング・フリッシュ「刑法における生命と自己決定権」

松本博之, 西谷敏編『現代社会と自己決定権——日独シンポジウム——』
(信山社) p. 151 (1997年5月)

「行為の存在論的構造——人格的行為論のスケッチ—— (一九六六年)」

「不処罰の妊娠中絶——違法か, 適法か, それとも何か—— (一九九二年)」

(上田健二と共訳)

「刑法における責任原則のための反時代的考察 (一九八六年)」

「正義に適った刑罰について——法哲学的エッセイ—— (一九八六年)」

アルトゥール・カウフマン著 上田健二監訳『転換期の刑法哲学 [第2版]』
(成文堂) p. 25, p. 102, p. 190, p. 262 (1999年3月)

アルビン・エーザー「ドイツ的視点から見た日本法における正当化と免責」

大阪市立大学法学雑誌45巻3・4号 p. 409 (1999年3月)

ヴォルフガング・フリッシュ「ドイツ環境刑法の概要と核心問題」

松本博之, 西谷敏, 佐藤岩夫編

『環境保護と法——日独シンポジウム——』(信山社) p. 487 (1999年3月)

アルビン・エーザー「インターネットと国際刑法」

松本博之, 西谷敏, 守矢健一編

『インターネット・情報社会と法——日独シンポジウム——』
(信山社) p. 385 (2002年11月)

ガブリエレ・ヴォルフスラスト

「遺伝子医療の限界としての法」(滝本シゲ子と共訳)

龍谷法学36巻1号 p. 136 (2003年6月)

ベルンハルト・ハフケ

「クラウス・ロクシンの学問的業績およびそのスタイルについての考察」

ベルント・シューネマン編著 吉田宣之, 浅田和茂, 鈴木彰雄訳

『ロクシン刑事法学への憧憬』(信山社) p. 43 (2005年2月)

A・エーザーほか編『『新ミレニアムを前にしたドイツ刑法学・回顧と展望』

の紹介(一)～(三・完)』(監修)

大阪市立大学法学雑誌53巻1号 p. 188 (2006年8月)

大阪市立大学法学雑誌53巻2号 p. 216 (2006年11月)

大阪市立大学法学雑誌53巻3号 p. 218 (2007年1月)

ヴォルフガング・フリッシュ

「刑法の展開にとっての法教義学の意義について」

松本博之, 野田昌吾, 守矢健一編

『法発展における法ドグマティックの意義——日独シンポジウム——』

(信山社) p. 195 (2011年2月)

カール＝ルートヴィヒ・クント

「量刑事実としての前科前歴および犯行後の事情」

ヴォルフガング・フリッシュ, 浅田和茂, 岡上雅美編著

『日独シンポジウム 量刑法の基本問題——量刑理論と量刑実務との対話——』

(成文堂) p. 147 (2011年11月)

外国文献紹介

エルンスト・ハイニッツ「刑事訴訟に於る鑑定人の独自調査活動の許容限界」

法学論叢87巻5号 p. 94 (1970年8月)

アルトゥール・カウフマン「完全酌酊犯の不法と責任」

関西大学法学論集21巻6号 p. 66 (1972年3月)

シルヴィオ・ラニエリ

「フランツ・フォン・リストとイタリアにおける実証刑法学派」

立命館法学99・100号 p. 77 (1972年3月)

デトレフ・クラウス「刑事手続における無罪推定の原則」

関西大学法学論集23巻1号 p. 81 (1973年4月)

G・シュベンデル「刑罰軽減事由としてのコンジチョ＝ジネ＝クア＝ノン思考

——量刑論各則への寄稿——」

- 法学論叢93巻3号 p. 109 (1973年6月)
ディートヘルム・キーナプフェル「統一的正犯の現象形式」
関西大学法学論集23巻2号 p. 112 (1973年7月)
カール・ペーターズ「失敗した再審手続」
龍谷法学10巻1号 p. 109 (1977年8月)
「世界の刑事再審法3 フランス」
Gerhart Grebing, Die Wiederaufnahme des Strafverfahrens in Frankreich」
判例タイムズ357号 p. 78 (1978年4月)
フリートリッヒ・シャフスタイン
「幅の理論、責任概念および刑法改正法による量刑」
龍谷法学12巻3号 p. 109 (1979年12月)
M・マイヴァルト
「酌量により運転不適格な場合における過失の標準について」
甲南法学20巻1・2号 p. 66 (1980年3月)
H-L・シュライバー「責任能力に関する新規定の意義と限界」
警察研究53巻8号 p. 81 (1982年8月)
「西ドイツにおける精神病院収容処分の問題点(一)(二・完)」
大阪市立大学法学雑誌31巻1号 p. 364 (1984年8月)
大阪市立大学法学雑誌31巻2号 p. 146 (1984年12月)
ヴォルフガング・ドゥ＝ボーア
「嫌悪神経症——刑法二〇条、二一条の枠内におけるその意義——」
龍谷法学18巻1号 p. 156 (1985年6月)
M・バウアー＝P・トス
「学際的問題としての犯罪者の責任無能力——刑法実務家のための指針——」
警察研究56巻10号 p. 73 (1985年10月)
ギュンター・エルシャイト「生活世界とシステムとの間のヘルメノイティク」
警察研究57巻4号 p. 76 (1986年4月)
ハインツ・ミュラー＝ディーツ
「統合的予防と刑法——一般予防の積極的側面について——」
立命館法学191号 p. 93 (1987年7月)
ゲルハルト・グレービング「罰金刑の比較法的検討・その二」
法学論叢122巻2号 p. 113 (1987年11月)
B・シューネマン「水域刑法における職務担当者の可罰性」

- 警察研究61巻11号 p. 71 (1990年11月)
ディームート・マイヤー 「『第三帝国』における司法と警察」
警察研究62巻9号 p. 71 (1991年9月)
F・デンカー 「結果と責任理念——刑法における結果の体系的意義および
実質的意義に関する議論について」
法と政治42巻3号 p. 163 (1991年9月)
B・G・ケリー 「逋脱罪」
警察研究64巻3号 p. 73 (1993年3月)
U・ノイマン
「原因において自由な行為に関する最近の議論における構成と論拠」
同志社法学234号 p. 206 (1994年1月)
H・ミュラー＝ディーツ 「量刑と効果指向」
立命館法学233号 p. 120 (1994年6月)
「資料・ドイツ『司法負担軽減法』における刑事手続の改正」
大阪市立大学法学雑誌41巻1号 p. 120 (1994年8月)
インゲボルク・ブッペ 「量刑事由としての犯行の有責な諸結果」
立命館法学240号 p. 268 (1995年9月)
J・グリュンデル 「責任との関わり——神学的・倫理的なパースペクティヴ——」
同志社法学246号 p. 525 (1996年3月)
「紹介を始めるにあたって」(松宮孝明と共同執筆)
ハンス・アッヘンバッハ 「経済刑法の改革の動き——1つの回顧」
立命館法学353号 p. 259, p. 260 (2014年6月)
「紹介を始めるにあたって」
アルビン・エーザー 「第1章 本プロジェクトの発生史・作業現場報告」
立命館法学368号 p. 298, p. 301 (2016年12月)
- 書 評**
- 大谷実・中山宏太郎編 『精神医療と法』
法律時報53巻7号 p. 85 (1981年6月)
井上正仁 『刑事訴訟における証拠排除』
法律時報58巻7号 p. 131 (1986年6月)
野村稔 『未遂犯の研究』
犯罪と刑罰2号 p. 121 (1986年10月)

- 松村格「共同正犯の共犯性と正犯性——システム論的考察（上）（中）（下）」
法律時報59巻7号 p. 111（1987年6月）
- 萩原滋「実体的デュー・プロセスの理論と法益保護の原則（1）～（4・完）」
法律時報60巻3号 p. 122（1988年3月）
- 武田誠「猥褻概念の再検討——日本の判例・学説を素材にして」
法律時報60巻12号 p. 138（1988年11月）
- 香川達夫「『強盗の目的』の意味」「強盗利得罪をめぐる若干の問題」「居直り強盗」
法律時報63巻7号 p. 84（1991年6月）
- 金澤文雄「原因において自由な行為」
法律時報64巻3号 p. 100（1992年3月）
- 恒光徹「不法原因給付の法理と詐欺罪・横領罪の成否——フランス法との比較法的検討」
法律時報64巻13号 p. 258（1992年12月）
- 安富潔『刑事手続とコンピュータ犯罪』
ジュリスト1014号 p. 157（1992年12月）
- 上嶋一高「背任罪（刑法二四七条）理解の再構成（一）～（四・完）」
法律時報65巻10号 p. 116（1993年9月）
- 城下裕二「量刑基準に関する一試論——量刑事情としての『犯罪後の態度』を中心に（一）～（四・完）」
法律時報66巻10号 p. 114（1994年9月）
- 高山佳奈子「故意の構造（一）（二・完）」
法律時報67巻11号 p. 66（1995年10月）
- 長井長信「方法の錯誤について」
法律時報68巻3号 p. 102（1996年3月）
- 鈴木左斗志「方法の錯誤について——故意犯における主観的結果帰責の構造」
法律時報69巻2号 p. 75（1997年2月）
- 塩谷毅「自己危殆化への関与と合意による他者危殆化について（一）～（四・完）」
法律時報70巻4号 p. 99（1998年4月）
- 平山幹子「不真正不作為犯について——『保障人説』の展開と限界（1）～（3・完）」
法律時報73巻1号 p. 101（2001年1月）
- 小林憲太郎「因果関係と客観的帰属（1）～（6・完）」

- 法律時報74巻2号 p. 110 (2002年2月)
安達光治「客観的帰属論の展開とその課題(1)～(4・完)」
法律時報75巻4号 p. 94 (2003年4月)
森永真綱「被害者の承諾における欺罔・錯誤(一)(二・完)」
法律時報76巻5号 p. 95 (2004年5月)
石川友佳子「生殖医療技術をめぐる刑事規制(一)(二・完)」
法律時報80巻1号 p. 110 (2008年1月)
加藤正明「因果関係における結果の規定について(一)(二・完)」
法律時報80巻11号 p. 97 (2008年10月)
佐伯仁志『制裁論』
刑事法ジャーナル21号 p. 102 (2010年3月)
富高彩「不可罰的・共罰的事後行為論と財産罪の成否(一)(二・完)」
法律時報82巻9号 p. 112 (2010年8月)
仲道祐樹「実行行為概念による問責行為の特定(一)(二・完)」
「複数行為による結果惹起における問責対象行為の特定」
「行為概念と回避可能性の関係——ドイツにおける否定的行為論を中心に(一)(二・完)」
(高山佳奈子と共同執筆)
法律時報83巻7号 p. 111 (2011年6月)
岡本昌子「正当防衛状況の創出と刑法三六条」
法律時報84巻6号 p. 111 (2012年6月)
東京弁護士会期成会明るい刑事弁護研究会編『責任能力を争う刑事弁護』
自由と正義64巻7号 p. 103 (2013年7月)
瀬川行太「結果発生への被害者の過失的関与について——被害者の自己答責性の原理を中心に(1)(2・完)」
法律時報86巻10号 p. 123 (2014年9月)
日本弁護士連合会刑事法制委員会編『Q&A 心神喪失者等医療観察法解説
〔第2版〕』
自由と正義66巻2号 p. 74 (2015年2月)
「特集 裁判員裁判における量刑と弁護活動〔季刊刑事弁護80号(2014年)〕」
法律時報87巻5号 p. 128 (2015年5月)
竹川俊也「刑事責任能力における精神鑑定人の役割(1)(2・完)」
法律時報88巻5号 p. 130 (2016年5月)

辞典・事典類

「証拠開示」など33項目

河本一郎, 中野貞一郎編集代表『法学用語小辞典』(有斐閣)
〔初版〕(1983年3月)
〔新版〕(1993年2月)

「改正刑法草案」など13項目

杉村敏正, 天野和夫編集代表
『新法学辞典』(日本評論社)(1991年2月)

「共謀罪」など112項目

中山研一編『刑事法小辞典』(成文堂)
〔初版〕(1992年10月)
〔補正版〕(1996年3月)
〔第2版〕(2003年8月)

「一厘事件」「原因において自由な行為」「コンピュータ犯罪」「財物」「心神耗弱」

「心神喪失」「責任」「責任主義」「責任能力」「不定期刑」「有価証券偽造罪」

伊藤正己, 園部逸夫編集代表『現代法律百科大辞典』(ぎょうせい)
1巻 p. 107, 2巻 p. 404, 3巻 p. 279, p. 364, 4巻 p. 534, p. 538,
5巻 p. 72, p. 74, p. 75, 6巻 p. 564, 7巻 p. 347 (2000年3月)

「共犯者の自白」など29項目

國井和郎, 三井誠編集代表
『ベーシック法学用語辞典』(有斐閣)(2001年10月)

「刑罰能力」「行為責任」「社会的責任論」「性格責任論」「精神医学」「責任主義」「責任条件」「責任阻却事由」「道義的責任論」「法医学」「有責行為能力」

三井誠, 町野朔, 曾根威彦, 中森喜彦, 吉岡一男, 西田典之編
『刑事法辞典』(信山社) p. 194, p. 230, p. 370, p. 467, p. 471,
p. 481, p. 482, p. 483, p. 576, p. 708, p. 770 (2003年3月)

「一厘事件」など31項目

佐藤幸治, 藤田宙靖, 長尾龍一, 淡路剛久,
奥島孝康, 村井敏邦, 寺田逸郎編修代表
『コンサイス法律学用語辞典』(三省堂)(2003年12月)

座談会

「特集・刑法総論のキーポイント いま, 刑法総論がかかえる重要な理論問題

を点検する」

堀内捷三 = 曾根威彦 = 川端博 = 浅田和茂
法学セミナー379号 p. 35 (1986年7月)

「刑法改正と私——佐伯先生に聞く——」

佐伯千仞 (話し手), 井戸田侃 = 浅田和茂 (聞き手)
犯罪と刑罰 6号 p. 133 (1989年12月)

「整備要綱骨子の総括的検討 (上) (下)」

松尾浩也 = 浅田和茂 = 渡邊一弘 = 岩村智文 = 田尾健二郎 = 岡田薫 = 三井誠
ジュリスト1122号 p. 4 (1997年11月)
ジュリスト1123号 p. 92 (1997年11月)

「司法精神医学と刑事責任能力論の回顧と展望」

保崎秀夫 = 影山任佐 = 中谷陽二 = 浅田和茂 = 北潟谷仁
季刊刑事弁護32号 p. 23 (2002年10月)

「犯罪被害者と刑事訴訟——犯罪被害者関連施策の総論的・各論的検討」

浅田和茂 = 川崎英明 = 山下幸夫 = 高田昭正
法律時報79巻7号 p. 88 (2007年6月)

「裁判員制度によって刑法理論はどう変わるのか」

浅田和茂 = 笠井治 = 齋野彦弥 = 中山博之 = 半田靖史 = 後藤昭 (司会)
季刊刑事弁護56号 p. 24 (2008年10月)

その他

「改正刑法草案の基本的性格」

法律時報46巻6号 p. 71 (1974年6月)

“Strafprozeßrecht – Bibliographie” (Lutz Walter と共同執筆)

Paul Eubel (Hrsg.), Das japanische Rechtssystem,
(Alfred Metzner Verlag) p. 267 (1979年)

「論点ゼミ<刑法> 責任能力論の視座」

LawSchool 19号 p. 96 (1980年4月)

「鑑定受託者による鑑定書について」

ジュリスト766号 p. 108 (1982年5月)

「西ドイツ刑事司法の現況——第七回 (一九八三年) 刑事弁護人大会にみる——」

(田中輝和と共同執筆)

法律時報55巻8号 p. 112 (1983年8月)

「西ドイツ刑訴一九八三年改正問題および西ドイツにおける外国人犯罪の問題——
第七回（一九八三年）西ドイツ刑事弁護人大会分科会の「まとめ」から——」
（田中輝和と共同執筆）

東北学院大学論集法律学23号 p. 101（1983年10月）

「バイエルン矯正事情1 バイエルン行刑の概観」
（平川宗信，松村格と共同執筆）

ジュリスト822号 p. 46（1984年10月）

「バイエルン矯正事情2 ラウフェン＝レーベナウ少年施設
（JVA Laufen=Lebenau）」（平川宗信，松村格と共同執筆）

ジュリスト823号 p. 81（1984年10月）

「バイエルン矯正事情3 シュトラウビング重罪施設（JVA Straubing/
行刑研修所（Justizvollzugsschule）」（平川宗信，松村格と共同執筆）

ジュリスト824号 p. 81（1984年11月）

「バイエルン矯正事情4 アイヒアッハ女子施設（JVA Aichach）」
（平川宗信，松村格と共同執筆）

ジュリスト825号 p. 82（1984年11月）

「バイエルン矯正事情5・完 ミュンヘン＝シュターデルハイム未決拘禁・
軽罪施設（JVA München=Stadelheim）」（平川宗信，松村格と共同執筆）

ジュリスト826号 p. 86（1984年12月）

「W・ハッセマー編『ヘルメノイティクの諸次元』の紹介（一）連載をはじめ
るにあたって」

警察研究57巻1号 p. 70（1986年1月）

「講演記録 最近の西ドイツにおける保安処分動向について」

第二東京弁護士会刊『こだち』24号 p. 1（1986年7月）

「ワークショップ 一般予防論」

刑法雑誌27巻4号 p. 160（1987年3月）

「刑法『改正』の阻止と『刑法改正問題』の始まり」

日本弁護士連合会『刑法改正問題の十三年——日弁連運動の歩みから——』
p. 98（1988年3月）

「変造テレホンカードと刑法」

法学セミナー増刊『法学入門』p. 42（1990年4月）

「講演記録 利益窃盗不処罰の根拠」

日本弁護士連合会刑法改正対策委員会『コンピュータ犯罪と現代刑法』

- (三省堂) p. 53 (1990年5月)
- 「環境刑法——行政従属性を中心として(一)連載を始めるにあたって」
警察研究61巻8号 p. 76 (1990年8月)
- 「私の判例研究／刑事法 事実認定の決め手は常識」
法律時報63巻3号 p. 82 (1991年2月)
- 「学部提携日独シンポジウム『法と手続』」
法律時報63巻13号 p. 71 (1991年12月)
- 「学会報告 国際刑法学会中華民国分会主催『環境刑法国際学術研討会』
に出席して」
刑法雑誌32巻2号 p. 145 (1992年3月)
- 「講演記録 なぜ『暴力団』は壊滅されないのか」
暴力団対策法シンポジウム実行委員会
『危険な暴力団対策法』 p. 49 (1992年8月)
- 「講演記録 日本における環境刑法の現状と問題点
Gegenwärtige Situation und Probleme des Umweltstrafrechts in Japan」
『環境刑法国際学術研討會論文輯』
(国際刑法學會中華民国分会) p. 195 (1992年11月)
- 「始期・終期の生命と刑事法——解題——」
犯罪と刑罰9号 p. 159 (1993年3月)
- 「講演記録 刑法学における責任と刑罰——法社会学との対話を求めて——」
法社会学45号『法の解釈と法社会学』 p. 144 (1993年4月)
- 「設例で学ぶ刑法の考え方講座 総合問題Ⅰ」
- 「設例で学ぶ刑法の考え方講座 総合問題Ⅱ」
アーティクル109号 p. 23, p. 25 (1995年3月)
- 「青物横丁医師殺人事件・事件の概要と論点」
- 「青物横丁医師殺人事件・精神鑑定」
法学セミナー502号 p. 52, p. 54 (1996年10月)
- 「組織犯罪対策立法問題」
東京弁護士会『刑法(刑事法対策特別委員会ニュース)』
p. 2 (1998年3月)
- 「精神鑑定を活かそう——本特集の意義」
季刊刑事弁護17号 p. 20 (1999年1月)
- 「刑事司法の科学化」

- ジュリスト1148号 p. 102 (1999年1月)
「講演記録 変革の中の刑事法——その内容と批判——：刑法関係」
日弁連刑事法制委員会『刑法通信』101号 p. 27 (1999年3月)
「シンポジウム『精神医療における個人情報の保護』——シンポジウムの概要」
法と精神医療20・21号 p. 43 (2007年12月)
「私の刑事法研究・三九年——『途上としての学問』について——」
大阪市立大学法学雑誌55巻1号 p. 453 (2008年8月)
「実体刑法の現状と課題——ハッセマー報告へのコメント——」
刑法雑誌49巻2・3号 p. 151 (2010年3月)
「刑法の判例と類推の禁止」
法学セミナー増刊 速報判例解説7号 p. 158 (2010年10月)
「シンポジウム『心神喪失者等医療観察法の現状と見直し』
——シンポジウムの概要」
法と精神医療25号 p. 50 (2010年11月)
「不親切な最高裁判例」
法学セミナー増刊 速報判例解説8号 p. 186 (2011年4月)
「刑事判例と憲法判断」
法学セミナー増刊 速報判例解説9号 p. 142 (2011年10月)
「法令の適用と裁判員裁判——本特集の趣旨——」
犯罪と刑罰21号 p. 1 (2011年11月)
「『佐伯千仞著作選集』の発刊にあたって〔解題〕」(井戸田侃・久岡康成と共同
執筆)
浅田和茂, 井戸田侃, 久岡康成編
『刑法の理論と体系』〔佐伯千仞著作選集 第1巻〕
(信山社) p. v (2014年11月)
「シンポジウム『発達障害と法』——シンポジウムの概要」
法と精神医療29号 p. 55 (2014年12月)
「『陪審制度を復活する会』と石松先生」
近畿大学法学63巻3・4号 p. 381 (2016年3月)
「性犯罪規定改正案に至る経緯と当面の私見——本特集の趣旨——」
犯罪と刑罰26号 p. 1 (2017年3月)